様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２３年６月２０日現在

機関番号：３２７０４
研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2008～2010
課題番号：２０５３０４８９
研究課題名（和文）　バングラデシュの内発的発展ークミッラ県ダウドゥカンディ郡での実態調査
研究課題名（英文）　Endogenous Development in Bangladesh: Research on Actual Conditions of the Rural Community in Daudkandi Thana, Kumilla District
研究代表者
鈴木　弥生（SUZUKI YAYOI）
関東学院大学・人間環境学部・教授
研究者番号：８０２８９７５１

研究成果の概要（和文）：本研究は、日米主導による援助によって農村の近代化が促進されたクミッラ県ダウドゥカンディ郡での内発的発展の地域展開の解明を課題とする。我々の調査からは、日米主導による援助では参加機会を剥奪されてきた貧困女性が、市民社会による社会開発プログラムへの参加を通して社会開発への関心を高めたり、自らと家族の well-being を向上させたりしている状況がみてとれた。ここに我々は、トリックル・ダウン仮説をよりどころとする近代化論とは対抗関係にある内発的発展の事例を見出すに至った。

研究成果の概要（英文）：This study examines the endogenous development in the rural community of Daudkandi Thana, Kumilla District, where have been progressed a modernization by foreign-aids, including Japan’s ODA and USAID. Although poor women have been excluded from the foreign-aids-funded rural development projects, they have been participating in the social development programme of the civil society such as NGOs, and raising their social awareness and the well-being of their family members. In this paper, we investigate case studies that prove the endogenous development theory to be valid. This approach towards development is different from approach adopted by institutions providing foreign aids which are emblematic of the modernization theory in context to their assumptions and the effectiveness of the trickledown effect.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2008 年度	1,500,000	450,000	1,950,000
2009 年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2010 年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
年度			
総　計	3,400,000	1,020,000	4,420,000

研究分野：社会開発論
科研費の分科・細目：社会学・社会学
キーワード：バングラデシュ、内発的発展、現地 NGO、クミッラ県

１．研究開始当初の背景

内発的発展論は「近代化論に対置する概念」であり、西欧をモデルとした近代化方式を地球規模で推し進めることへの疑問や批判の中から生まれている。それは、生態系の破壊、南北格差や国内的格差、貧困や飢餓の

問題等をそれぞれの地域という小さい単位の場で解決してゆこうとするものである（鶴見和子、川田侃『内発的発展論』東京大学出版会、1989 年、西川潤『人間のための経済学』岩波書店、2000 年）。

バングラデシュの農村では、BRAC やグラミン銀行といった市民社会が地域ごとの社会開発を推進してきた。その開発過程では、相互扶助関係を基礎として貧困層の参加が重視され、とりわけ農村に居住する女性たちの内発的な活動が展開されている。ところが、先行研究をみると、小規模融資に焦点をあてたものが多く報告されている。そこでは、「融資が女性のエンパワメントに貢献している」という肯定論に対して、①対象者は返済能力のある者に限定されている、②融資を受けているのは女性であるが、実際に運用しているのは男性（主に夫）である、③BRAC やグラミン銀行はエリート層の雇用機会となっており、貧困層の well-being 実現よりも職員の生活向上のためにある等の批判的見解がみられる。

しかし、これらの先行研究では、実際に融資を受けている女性と家族の well-being 実現に向けた活動に関するより詳細な個別事例は必ずしも明らかにされていない。また、市民社会の活動が、農村の社会関係にどのような影響を及ぼしているのか、という視点からの研究も必ずしも行われていない。

２．研究の目的

本研究は、バングラデシュ農村における「内発的発展」の地域展開の解明を課題とする。この課題を解くために、現地 NGO を始めとする市民社会の活動への貧困層の参加が、農村の社会開発にどのような影響を及ぼしているのかを明らかにする。研究対象地域は、現在も継続して調査を行っているクミッラ県ダウドゥカンディ郡を選定する。当該地域では、世界でも最大規模を誇る BRAC のほか、ASA（現地 NGO）やグラミン銀行がブランチ・オフィスを構えて活動している。中でも、BRAC は、小規模融資のみならず、識字・就学活動、家禽研修、ダウリー撲滅や貧困女性の支援（弁護活動）、既得権益層に流入しがちな援助物資の監督等、農村内の格差改善に向けた多様な活動を展開している。だが、これらの活動内容や貧困女性の参加状況（詳細）については、必ずしも明らかにされていない。

政府による開発では末端におかれてきた貧困女性の参加は、家族関係や農村の社会関係にいかなる変化を及ぼしているのであろうか。これらを現地での実態調査を通して明らかにしたうえで、当該地域の内発的発展について分析することを目的とする。

３．研究の方法

バングラデシュでの現地調査及び資料・先行研究の収集とそれらの分析による。資料・先行研究の収集については、BRAC や ASA を始めとする現地 NGO、バングラデシュの各関係省庁、政府、関係機関のほか、大英図書館（ロンドン）、議会図書館、世界銀行情報センター（以上、Washington, D.C.）で行っている。

４．研究成果

（１）調査対象地域の特徴

研究対象地域のクミッラ県には、パキスタン時代の 1960 年以降、アメリカ主導の「コミラモデル」＝緑の革命により、HYV（High Yield Variety；多収穫新品種）がいち早く導入された。それに伴い、灌漑設備、化学肥料・農薬が他県に先駆けて普及した。また、余剰農作物の輸送を目的として、道路・橋梁建設にも力が注がれた。独立後は、日本 ODA

により首都ダカとクミッラ県を結ぶメグナ橋とメグナ・グムティ橋が供与され、当該地域の余剰農作物をダカに輸送することが可能になった。そして、これら橋梁の東側に位置するダウドゥカンディ郡を主たる対象とした「モデル農村開発計画；Model Rural Development Programme」（日本 ODA）は、これまでに日米によって実施されてきた援助・開発の延長線上にあると考えられるが、ここでもコミラモデルの実験にならって、近代農法を奨励した。

その成果は、乾期に限って多収穫新品種ボロ稲の生産量を増やしたことである。しかし、近代農法は灌漑用ポンプと大量の用水、多くの化学肥料と農薬を使用するため、農民にかなりのコスト負担がかかる。実際にも、農業生産の機械化により、日傭の農業労働者は仕事を奪われている。また、多収穫新品種の生産は乾期に集中しているため、雨期に行われる在来種米の作付面積は激減している。その結果、多くの貧困層は雨期に雇用機会を失っている。また、こうした問題のしわよせは、とりわけ貧困女性や子どもに及んでいる。このような状況をみるにつけ、我々の調査では、貧困層へのトリックル・ダウン効果を確認することはできなかった。したがって、この地域では大量の失業者や不安定就労者が増大し、貧困問題は依然未解決の問題として残されている。

（２）調査対象地域における市民社会の活動と貧困女性の参加状況

2010 年 1 月現在、我々の研究対象地域であるクミッラ県ダウドゥカンディ郡では、21 の現地 NGO とグラミン銀行が活動している。中でも、BRAC と ASA、そしてグラミン銀行といった市民社会がより多くの貧困女性を対象とした活動を展開している。そこでの調査内容から、ASA とグラミン銀行の貧困女性を対象とする活動は、マイクロファイナンスに特化していることが明らかになっている。

グラミン銀行は当該地域で 1991 年から活動を始め、貧困女性にはもっぱらショミティの組織化及びマイクロファイナンスを奨励している。それまで多くの貧困女性は、農村はもとよりバリ（家屋とその周辺）の外に出たこともなかった。そのうえ、家族や親族以外の男性と関わる機会もなかったことから、ショミティ組織化の過程は容易ではなかった。また、それまで多くの女性は、経済的にも社会的にも男性に依存することを余儀なくされてきた。ショミティを媒体として少額融資を活用するようになった貧困女性は、徐々にではあるが、自己雇用のスキルや収入を向上させている。このような貧困女性のエンパワメントは、家庭内での決定権や子どもの就学・識字等に重要な影響をもたらしている。また、ショミティ組織化及び貧困女性のエンパワメントは、グラミン銀行の介入のみならず、農村内の相互扶助関係が不可欠であったとみることができる。

これに対して、BRAC は 2000 年以降活動を始めているが、その特徴は、貧困女性と家族の well-being 向上を目的として、保健医療、人権・法的支援、マイクロファイナンス、識字・教育等を結びつける総合的な手法をとっていることである。職員は農村内に入り、援助・開発では末端におかれてきた貧困女性との対話を大切にしている。そのうえで、伝統的な相互扶助関係を媒体として草の根から貧困層を組織化し（ショミティの形成）、就学・識字、ダウリー撲滅、少額融資貸付といった社会開発に貧困女性が参加するプロセスを重視している。政府との共同事業にしても、それまで行われてきた上から下への援助

を見直し、貧困女性・家族の well-being 向上や参加に結びつくような方法へと改善している。それと同時に、援助によってユニオン評議会議長に集中した権限の分散化を図ろうともしている。

このように、BRAC の活動は多岐にわたっているが、農村でのプログラムは、貧困層の生活状態に適した方法を草の根レベルで検討し、必要に応じてプログラムの改善や開発を行っている。その背景には、小地域でのプロジェクトの実施と結果の分析、問題改善方法の発見といった独自の学習過程がある。そこでは、貧困層を無力な存在として位置づけたり、ただ単に物資を供与したりといった方法は採っていない。それは、外国主導による援助や解発の在り方を見直すという営みでもある。そのうえ、BRAC による活動への参加者は、草の根レベルにおいて年々増加傾向にある。

また、同郡では平均して３つの市民社会が貧困女性を草の根から組織化するショミティを媒体として活動しているが、近年、同郡Ｐ村では、BRAC、ASA、グラミン銀行の他、２つの現地 NGO が活動を開始した。というのも、当該地域では外国主導による援助との関係から貧富格差が拡大傾向にあり、より困難な状況を余儀なくされている貧困層が存在していることが明らかになってきたからである。とりわけ、道路拡張工事によって屋敷地を剥奪されたＰ村の貧困層はスラムを形成しているが、その地域では、ASA、BRAC が貧困層の well-being 向上に尽力している。

さらに、同郡で活動する現地 NGO は、農村での社会開発を推進するうえで市民社会の連携がより重要になると認識している。そのため、これら現地 NGO が政府やグラミン銀行を巻き込んで、貧困女性の参加状況、農村内の社会問題や貧困問題の解決等について定期的な話し合いを行っている。ここに我々は、市民社会の連携をみてとることができる。

草の根から貧困女性を組織化し、彼女たち自らの参加を重視する現地 NGO やグラミン銀行による開発手法は、近代化論やトリックル・ダウン仮説を拠り所とする外国主導の開発とは異なっている。本研究から、我々は、調査対象地域の範囲内ではあるが内発的発展の事例を見出すに至った。

さいごに、本研究が限られた地域と時間の中で行われた調査に基づいているという研究の限界も示しておかなければならない。なお、BRAC とグラミン銀行の活動状況及び貧困女性の参加状況については、以下、③と④の論文に掲載した。ASA の活動状況及び貧困女性の参加状況については、現在執筆中である。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計４件）

① 鈴木弥生・佐藤一彦、「バングラデシュ農村の社会開発－BRAC による貧困女性の組織化」『国際開発研究』国際開発学会、第 20 巻 1 号、2011 年 6 月、2011 年 6 月 20 現在印刷中（査読有）

② 鈴木弥生、「グラミン銀行による貧困女性の組織化とエンパワメント」『社会福祉学』日本社会福祉学会、第 51 巻 3 号、2010 年、44-63 頁（査読有）

③ 鈴木弥生、「バングラデシュ農村にみる貧困の女性化と子ども」『国際幼児教育研究』国際幼児教育学会、第 17 巻、2009 年、45-54 頁（査読有）

④ 鈴木弥生・佐藤一彦、「バングラデシュクミッラ県における貧困層の生活状態－モデル農村開発計画におけるインパクト」『社会福祉学』日本社会福祉学会、第 49 巻 2 号、

2008 年、135-149 頁（査読有）
〔その他〕
ホームページ等
鈴木弥生「子どもの労働」『関東学院大学 教員コラム（24)』2008 年 11 月 6 日（査読無）
http://ningen.kanto-gakuin.ac.jp/modules/news/print.php?storyid=100

鈴木弥生「バングラデシュの子どもたちー就学機会・子ども時代の喪失を余儀なくされる子どものメイド」『関東学院大学 教員コラム（87)』2010 年 1 月 28 日（査読無）
http://ningen.kanto-gakuin.ac.jp/modules/news/print.php?storyid=218

６．研究組織
(1)研究代表者
鈴木　弥生（SUZUKI YAYOI）
関東学院大学・人間環境学部・教授
研究者番号：80289751

(2)研究分担者
（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者
（　　）

研究者番号：